

令和元年度「私立大学研究ブランディング事業」
『立正大学ウズベキスタン学術交流プロジェクト』外部評価報告書

事業名	立正大学ウズベキスタン学術交流プロジェクト
大学名	立正大学
申請タイプ	タイプB
評価対象年度	令和元年度
事業概要	<p>本事業は、本学の特色を生かした学際的領域の研究事業である。ウズベキスタン研究機関との学術協定に基づき、現地研究者と共同で当地に残る古代仏教遺跡の発掘、保存修復、科学分析を行い、日本への仏教展開過程を明らかにする。そして 2015 年に安倍首相と故カリモフ前大統領が発表した共同声明の内容を深化すべく、当地での発見を内外に公表し、研究事業への展開や教育交流など、学術・教育両面での成果を還元することを目指す。</p>
事業目的	<p>本事業は、ウズベキスタン共和国科学アカデミー等との協定に基づき、現地研究者と共同で当地に残る古代仏教伽藍址の発掘、保存修復、出土物の整理調査および科学的分析を行い、ユーラシア大陸における仏教文化の展開過程の一端を明らかにすることを主目的としている。また立正大学は日蓮宗の僧侶の教育機関を淵源としており、日蓮の社会貢献への誓いを現代的に言い換えた「正しきを立てて、安穏な社会、平和な世界に寄与しよう」という立正精神を「建学の精神」としている。しかし、現状では本学の独自性や建学の精神について広く認知されているとは言い難く、今後一層の努力と貢献が求められている。そこで、「仏教学・歴史学・考古学・地理学」という創設以来の学問領域に端緒となる課題をおきつつ、8学部15学科からなる総合大学として広く研究者の参画を求めやすく、かつ我が国の研究者にとって未解明な領域を多く含む課題を設定することで、本学の独自性と建学の精神を活かした貢献ができると考えた。ウズベキスタンは旧ソ連の経済圏に属し、かつイスラーム教を国教としているという点では日本の現代社会のありたかとは距離がある一方で、親日国であることから、今後の相互交流や研究によって得られる人脈や知識には双方に新たな可能性を期待できる。</p> <p>本学の蓄積ある学問を誠実に深めていくことで、我が国の文化や世界のなりたちの一端を解き明かし、世界の人々が希求する平和かつ文化的な交流に貢献する総合大学というイメージを定着させたい。</p>

評価年度における 自己点検・評価項目	達成度評価 S・A・B・ C	内容等の記述
総合評価(所見・事業全体としての概評)	A	<p>本ブランディング事業の3年を含めた5年に渡る発掘・調査・講演を刊行物にまとめただけでなく、新たな関連遺跡の調査保存の活動を展開中で、研究・調査と学术交流の点で高く評価できる。今後ウズベキスタン本国の研究者と連携し、さらなる研究の発展が望まれる。</p> <p>ブランディングという観点からみても、積極的な活動が展開され、学外へのアピールは一定の効果があったと思われる。</p> <p>文科省の事業としては終了となったが、貴学が事業を継続し、両国の文化交流の発展に寄与されることを望む。</p>
実施目標・実施計画 ・設定の適切さ、実現性 ・適切な運営体制の整備	A	<p>実施目標・実施計画の到達度は概ね十分と評価できる。</p> <p>昨今、どの大学でもIRの重要性が増している。今後、ブランディング力強化のため、独自の分析組織を立ち上げて、複合的評価をおこなっていくことをあらためて提案したい。</p> <p>発掘遺物の保全について期間中に達成できていないものの、新型コロナウイルス感染拡大による活動縮小が避けられない厳しい状況で、今後に望みをつないだといえる。</p>
事業成果 ・研究活動 ・学外へのブランディング※ ・学内へのブランディング	A	<p>一定の成果が出ていると認められる。特に、学外ブランディングについては、昨年度より露出は低下したものの、内容の充実した報告書などの刊行をとおり、学外にアピールできた。また、現地調査に大学院生が参加したことは、学内ブランディングに加え、教育効果の面でも非常に有意義であった。今後、更なる学内協力体制の構築と</p>

		あわせ、他大学や公の機関と提携しながら活動することによって、更なるブランディング力の強化が望まれる。 本プロジェクトを通じて、貴学の在学生・卒業生が母校を誇りに出来るような活動を継続して行くことが肝要であり、学内での肯定感を高めていくことも求められる。今後もますますウズベキスタンとの学術交流・文化交流が発展することを期待する。
補助金・研究費の使用妥当性	A	妥当な使用だと判断できる。

※ 学外へのブランディングは、日本でのブランディング・ウズベキスタンでのブランディングをそれぞれ別に評価する

※達成度評価の基準

- S：当初の計画・目標を大幅に上回っている。
- A：当初の計画・目標を上回っている。
- B：当初の計画・目標をおおむね達成している。
- C：当初の計画・目標を下回っている。

【外部評価委員会委員（氏名五十音順、敬称略）】

- 有賀祥隆（東京藝術大学客員教授、東北大学名誉教授）
- 佐伯孝弘（清泉女子大学学長）
- 島谷弘幸（九州国立博物館長）
- 中野照男（東京文化財研究所 名誉研究員・客員研究員）